

第14章

主クリシュナの他界

第1節

सूत उवाच

सम्प्रस्थिते द्वारकायां जिष्णौ बन्धुदिदृक्षया ।
ज्ञातुं च पुण्यश्लोकस्य कृष्णस्य च विचेष्टितम् ॥ १ ॥

sūta uvāca

samprasthite dvārakāyām

jiṣṇau bandhu-didṛkṣayā

jñātum ca puṇya-ślokasya

kṛṣṇasya ca viceṣṭitam

sūtaḥ uvāca—シュリー・スータ・ゴースヴァーミーが言った; *samprasthite*—〜に行ったあと; *dvārakāyām*—ドウヴァーラカーの都; *jiṣṇau*—アルジュナ; *bandhu*—友人や親族達; *didṛkṣayā*—彼らに会うために; *jñātum*—知るために; *ca*—もまた; *puṇya-ślokasya*—自らの栄光がヴェーダ聖歌で歌われている人物の; *kṛṣṇasya*—主クリシュナの; *ca*—そして; *viceṣṭitam*—さらなる活動の計画。

シュリー・スータ・ゴースヴァーミーが言った。「アルジュナは、主シュリー・クリシュナや友人たちに会いに、そして主が次になにをしようとしているのかを知るためにドウヴァーラカーに向かった」

要旨解説

『バガヴァッド・ギーター』で言われているように、主は信心深い人々を守り、不敬な者たちを滅ぼすために地上に降誕します。そして、クルクシェートラの戦争が終わり、マハーラージャ・ユディシュティラを王座に就けたことで、主の使命はまっとうされました。パーンダヴァ兄弟たち、特にシュリー・アルジュナは主の永遠の仲間であることから、アルジュナは、主が次にどのような活動を考えているのかを聞きに、ドウヴァーラカーに向かったのです。

第2節

व्यतीताः कतिचिन्मासास्तदा नायात्ततोऽर्जुनः ।
ददर्श घोररूपाणि निमित्तानि कुरुद्वहः ॥ २ ॥

vyatītāḥ katicin māsās
tadā nāyāt tato 'rjunaḥ
dadarśa ghora-rūpāṇi
nimittāni kurūdvahaḥ

vyatītāḥ—経過したあと; *katicit*—2、3の; *māsāḥ*—月; *tadā*—その時; *na āyāt*—戻らなかつた; *tataḥ*—そこから; *arjunaḥ*—アルジュナ; *dadarśa*—見た; *ghora*—恐ろしい; *rūpāṇi*—現われ; *nimittāni*—さまざまな原因; *kuru-udvahaḥ*—マハーラージャ・ユディシュティラ。

数ヶ月が過ぎてもアルジュナはまだ戻ってこない。マハーラージャ・ユディシュティラは、恐ろしい不吉な前兆を見るようになった。

要旨解説

主シュリー・クリシュナ、最高人格主神は「永遠なる存在」と言われており、私たちが知る太陽というもっとも強力な存在よりも強力な方です。主が1回呼吸をするあいだに、何億何千という太陽が主によって作られ、また破壊されるのです。物質界にある太陽は、あらゆる生産力と物質エネルギーの源と考えられており、たった1つの太陽から、生活に必要な物資が私たちに供給されています。ですから、主が地上にみずから存在していたとき、人類の平和と繁栄に必要なものごと、とくに宗教と知識は、主がいたことで完璧に示されていました。燃えさかる太陽という存在によって世界が光に満ちあふれているように。マハーラージャ・ユディシュティラは、自分の王国に矛盾がいくつか起こっている様子が見え、そのため、長く不在になっているアルジュナの身を案じ、ドウヴァーラーカーの幸福の知らせがまったくないことを不安に思うようになりました。こうして彼は、主クリシュナの他界が近づいているのでは、と考えています。そうでなければ、このような恐ろしい不吉な前兆が見えるはずがなかったのです。

第3節

कालस्य च गतिं रौद्रां विपर्यस्तर्तुधर्मिणः ।
पापीयसीं नृणां वार्तां क्रोधलोभानृतात्मनाम् ॥ ३ ॥

kālasya ca gatim raudrām
viparyastartu-dharminah
pāpīyasīm nṛṇām vārtām
krodha-lobhānṛtātmanām

kālasya—永遠なる時の; ca—もまた; gatim—方向; raudrām—恐ろしい; viparyasta—逆行して; ṛtu—季節の; dharminah—秩序; pāpīyasīm—罪深い; nṛṇām—人類の; vārtām—生計の方法; krodha—怒り; lobha—貪欲; anṛta—欺瞞; ātmanām—人々の。

彼は、永遠なる時の方向が変化したのを見た。じつに恐ろしい光景である。そして季節の秩序が混乱をきたした。大衆は、貪欲、怒り、虚偽の質をつのらせている。また、彼らが不正な手段で生計をたてるようになっていく様子を目のあたりにした。

要旨解説

人類文化が最高人格主神との愛情関係と切りはなされた状態におちいると、季節の移り変わりが変化し、不正な手段を使った生活、貪欲、怒り、詐欺などの兆しがはびこるようになります。季節の秩序が乱れると、ある季節の環境が別の季節に見られるようになる——雨期が秋になったり、花が狂い咲きし、くだものが別の季節に実ったりする——ということです。不信心な人間はいつの世でも貪欲、怒り、欺瞞に満ちています。そのような輩は、正規の市場であろうと闇市場だろうと、どのような手段を使ってでも生計をたてようとします。マハーラージャ・ユディシュティラが統治していた時代、このような兆しは、世に見られなかったからこそ、かえって人目についたものでした。しかし、自分の王国で神聖な雰囲気にならずかに異変が生じた様子に気づいてひじょうに驚き、やがて主が物質界から去っていくのでは、という思いをそこはかたく感じました。不正な手段による生計とは、定められた義務からの逸脱も含まれます。ブラーフマナ、クシャトリヤ、ヴァイシャ、シュードラなど、だれに対しても、定められた義務が用意されているのですが、そのような義務をはたすことなく、人の義務を自分の義務と主張する者は、不正で不適當な義務をはたしていることとなります。人生における高尚な目標を見失い、この地上での束の間の生涯がすべてだと思ふ人々は、富や権力を飽くことなく求めるようになります。無知が、人間社会の異常な状態の元凶であり、特にこの墮落の時代でこの無知を消しさるには、『シュリーマド・バーガヴァタム』という姿で光を投げかける力強い太陽が用意されています。

第4節

जिह्मप्रायं व्यवहृतं शाठ्यमिश्रं च सौहृदम् ।
पितृमातृसुहृद्भ्रातृदम्पतीनां च कल्कनम् ॥ ४ ॥

jihma-prāyaṃ vyavahṛtam
śāthya-miśram ca sauhṛdam
pitṛ-mātr-suhṛd-bhrātr-
dam-patīnām ca kalkanam

jihma-prāyam—騙している; *vyavahṛtam*—すべての通常の取引において; *śāthya*—二枚舌;
miśram—～へと悪化して; *ca*—そして; *sauhṛdam*—友好的で、好意を寄せる者に関して;
pitṛ—父親; *mātr*—母親に関して; *suhṛt*—好意を寄せる者; *bhrātr*—自分の兄弟;
dam-patīnām—夫と妻に関して; *ca*—もまた; *kalkanam*—互いの口論。

一般の商取引やつきあいは、人々の騙しあいのためにけがれたものとなり、それは友人同士にでさえ見られた。家族のあいだでは、父、母、子、好意を寄せる人々、兄弟たちのなかでいつも誤解が生じ、妻と夫のあいだにも、緊張と口論が絶えなかった。

要旨解説

条件づけられた生命体は4つの欠陥、すなわち間違い、狂気、無能力、詐欺の質を持っています。この4つが生命体の不完全さを表わしており、なかでも人を騙そうとする傾向がひどき目立っています。このような欺瞞の質が条件づけられた魂のうちにあるのは、もともと彼らは物質界を支配しようとする不自然な望みを満たすためにこの世界にいるからです。純粋な境地にいる生命体はこの法則の影響を受けません。自分が至高の生物に永遠に仕える立場にいることをよく知っているからであり、至高主の所有物をまちがって支配しようと気持ちでいるよりは、奉仕の精神を持ちつづけることはいつでも正しいのです。条件づけられた状態にいる生命体は、たとえ自分が見渡すものすべての支配者になったとしても満たされません。本当の支配者になったわけではないため、もっとも近い、あるいは親しい親族たちも含むさまざまな欺瞞の犠牲者になります。満たされないそのような状況では、父と子、あるいは夫と妻のあいだにでさえ、調和などありえません。しかし、争いに満ちたこのような苦境さえ、一つの方法で鎮めることができます。それが主への献愛奉仕です。欺瞞の世界は主への献愛奉仕をとおした対応策で止められますし、それ以外に方法はありません。マハーラージャ・ユディシュティラは目のまえに起こっているさまざまな不均衡な兆しを見て、主が地球から姿を消そうとしていると推測したのです。

第5節

निमित्तान्यत्परिष्टानि काले त्वनुगते नृणाम् ।
लोभाद्यधर्मप्रकृतिं दृष्ट्वाचानुजं नृपः ॥ ५ ॥

nimittāny atyariṣṭāni
kāle tv anugate nṛṇām
lobhādy-adharma-prakṛtiṃ
dṛṣṭvovācānujam nṛpaḥ

nimittāni—原因になる; ati—非常に重大な; ariṣṭāni—悪い兆し; kāle—そのうちに; tu—しかし; anugate—終わっている; nṛṇām—一般大衆の; lobha-ādi—たとえば貪欲のような; adharma—無宗教; prakṛtiṃ—習慣; dṛṣṭvā—見ている; uvāca—言った; anujam—弟; nṛpaḥ—王。

やがて大衆は、貪欲、怒り、うぬぼれなどをなんとも思わなくなっていた。このような不吉な兆しを見たマハーラージャ・ユディシュティラは、弟に話しはじめた。

要旨解説

ひじょうに敬虔な王だったマハーラージャ・ユディシュティラは、貪欲、怒り、無宗教、欺瞞といった冷酷な気質が社会にあつというまにはびこる様を見て困惑しています。この節の言葉からわかるように、当時の人々は墮落した社会にあるこのような兆しは経験したことがなく、そんな彼らにとって、カリ・ユガという争いの時代の到来はじつに驚くべき事態だったのです。

第6節

युधिष्ठिर उवाच

सम्प्रेषितो द्वारकायां जिष्णुर्बन्धुदिदृक्षया ।
ज्ञातुं च पुण्यश्लोकस्य कृष्णस्य च विचेष्टितम् ॥ ६ ॥

yudhiṣṭhira uvāca
sampreṣito dvārakāyām
jiṣṇur bandhu-didṛkṣayā
jñātum ca puṇya-ślokasya
kṛṣṇasya ca viceṣṭitam

yudhiṣṭhiraḥ uvāca—マハーラージャ・ユディシュティラが言った; sampreṣitaḥ—～に行つて; dvārakāyām—ドゥヴァーラーカー; jiṣṇuḥ—アルジュナ; bandhu—友人達; didṛkṣayā—会うために; jñātum—知ること; ca—もまた; puṇya-ślokasya—人格主神の; kṛṣṇasya—主シュリ

ー・クリシュナの; ca—そして; viceṣṭitam—活動の予定。

マハーラージャ・ユディシュティラが弟のビーマセーナに言った。「私はアルジュナをドゥヴァーラカーに送り、友人に会い、人格主神クリシュナがこれからなにをするのか主御自身から聞くよう頼んだ」。

第7節

गताः सप्ताधुना मासा भीमसेन तवानुजः ।
नायाति कस्य वा हेतोर्नाहं वेदेदमञ्जसा ॥ ७ ॥

gatāḥ saptaḍdhunā māsā
bhīmasena tavānujaḥ
nāyāti kasya vā hetor
nāham vededam añjasā

gatāḥ—行ってしまった; sapta—7; adhunā—現在まで; māsāḥ—月; bhīmasena—おおビーマセーナよ; tava—あなたの; anujaḥ—弟; na—～しない; āyāti—戻ってくる; kasya—なんのために; vā—あるいは; hetoḥ—理由; na—～ない; aham—私; veda—知っている; idam—これ; añjasā—実際に。

かれこれ6ヶ月が過ぎたというのに、かれはまだ戻ってこない。いったい向こうで何が起きているのか、私にはわからない。

第8節

अपि देवर्षिणादिष्टः स कालोऽयमुपस्थितः ।
यदात्मनोऽरामाक्रीडं भगवानुत्सिसृक्षति ॥ ८ ॥

api devarṣiṇādiṣṭaḥ
sa kālo 'yam upasthitaḥ
yadātmano 'ṅgam ākriḍam
bhagavān utsisṛkṣati

api—～かどうか; deva-ṛṣiṇā—半神・聖者（ナーラダ）によって; ādiṣṭaḥ—教えた; saḥ—それ; kālaḥ—永遠なる時; ayam—これ; upasthitaḥ—到着した; yadā—～の時; ātmanaḥ—主自身の; aṅgam—完全部分; ākriḍam—表われ; bhagavān—人格主神; utsisṛkṣati—終わろうとしている。

デーヴァリシ・ナーラダがそれとなく語られたように、主は地上での娯楽を終わらせようとされているのだろうか。もうその時が来てしまっているのだろうか。

要旨解説

何度も話してきたように、最高人格主神・主シュリー・クリシュナは、無数の完全拡張体を持ち、そのどれもが、等しい力をそなえていても別々の機能をはたします。『バガヴァッド・ギーター』には主みずから語った言葉があり、そのどれもが、さまざまな完全部分体あるいは完全部分体の部分体を指しています。

「宗教活動が衰退するとき、また無宗教が台頭するときはいつでも、そしてどこでも、わたしはみずから降誕する」（第4章・第7節）

「敬虔な者を救い、邪悪な人間を滅ぼすために、また宗教原則を再確立させるために、わたしはすべての創造期をとおして降誕する」（第4章・第8節）

「わたしが活動をやめれば、全人類がまちがって導かれるだろう。わたしが望ましくない人間を作りだす元凶になり、そのことで、全生命体の平和を破壊してしまうことになる」（第3章・第24節）

「偉大な人物がすることに一般人も従う。また偉人が模範的な行動をとおしてしめす基準に、世界も従おうとする」（第3章・第21節）

このような主の言葉は、主のさまざまな完全部分体、すなわちサンカルシャナ、ヴァースデーヴァ、プラデュムナ、アニルッダ、ナーラーヤナといった主の拡張体を指しています。これらはどれも、主の超越的な拡張体としての主自身ですが、主シュリー・クリシュナの場合、さまざまな段階の献愛者たちと崇高な交流をしながら活動します。そしてなおかつ主クリシュナは、ブラフマーの時間の24時間（86億年）に1回、各宇宙に本来の姿で現われ、そしてその崇高な娯楽すべてが規則的な一連の流れのなかで、各宇宙で展開されるのです。しかしその規則的な流れで為される主クリシュナ、主ヴァースデーヴァなどの活動は、無知な人々にとってはあまりにも複雑なため、理解できるものではありません。主自身と主の超越的な体のあいだに違いはありません。拡張体はさまざまな活動を行ないませんが、主が主シュリー・クリシュナとして降誕するとき、主の他の完全部分体がヨーガマーヤーと呼ばれる想像を絶する力で主と一体になり、そのためヴリンダーヴァナの主クリシュナは、マトウラーのクリシュナとも、そしてドウヴァーラカーのクリシュナとも違っていています。ヴィラートゥ・ルーパにしても、想像を絶する主の力ゆえに、主クリシュナと同じ存在ではありません。クルクシェートラの戦場でしめされたヴィラートゥ・ルーパは、主の物質的観念の姿です。ですから、一見、主クリシュナは狩人の矢で殺されたように見えるのですが、私たちは「主がいわゆる物質的な体を物質界に残したものと理解しなくてはなりません。主はカイヴァリヤ (kaivalya) であり、すべては主から作り出されたのですから、主には物質も精神もま

まったく同じことです。ですから、主があるタイプの体を捨てたり、あるいは別の体を受けいれたりしても、主がふつうの生命体だということではありません。このような活動はどれも、主の想像を絶する力ゆえに、同時に一つ、そして異なっているのです。マハーラージャ・ユディシュティラが、主の他界の可能性を嘆いているのは、一人の偉大な友人が他界していくことを嘆いているだけのことであり、じっさい主は、知性のない人たちが考えるように、その超越的な体を捨ててしまうわけではありません。その程度の知性しかない人たちは、主自身が『バガヴァッド・ギーター』で、ムーダという名前を使って非難しています。主が自分の体を残していった、ということは、主がそれぞれのダーマ (dhāma・超越的な住居) に完全部分体を残していったということです。ちょうど、主が物質界にヴィラートウ・ルーパを残していったように。

第9節

यस्मान्नः सम्पदो राज्यं दाराः प्राणाः कुलं प्रजाः ।
आसन् सपत्नविजयो लोकाश्च यदनुग्रहात् ॥ ९ ॥

yasmān naḥ sampado rājyaṁ
dārāḥ prāṇāḥ kulam prajāḥ
āsan sapatna-vijayo
lokāś ca yad-anugrahāt

yasmāt—～である者から; naḥ—私達の; sampadaḥ—富; rājyaṁ—王国; dārāḥ—優れた妻; prāṇāḥ—命の存在; kulam—王家; prajāḥ—臣下達; āsan—可能になる; sapatna—競争者達; vijayaḥ—征服している; lokāḥ—高い惑星での将来の生活; ca—そして; yat—～である者によって; anugrahāt—～の慈悲によって。

主の慈悲だけによって、私たちが得た王にふさわしい富、良妻、生活、子どもたち、臣下への支配力、敵を破って得た勝利、将来高い惑星に住むことなどを可能にしたのである。なにもかも、私たちへの主のいわれなき慈悲にほかならない。

要旨解説

物質的な繁栄には、良き妻、幸せな家庭、十分な土地、賢い子ども、高貴な親族、競争者に勝つこと、そして善行を積んで快適で十分な便宜を楽しめる天国の惑星に高められることなどが含まれます。このような便宜を手に入れるには、肉体労働や不正な手段でも得られるのですが、至高主の慈悲があってこそ実現するものです。努力して得られる繁栄も、主の慈

悲次第です。主の恩恵のほかに、いっしょうけんめい働くことも必要ですが、主が恩恵を授けなかったら、ただ働くだけでは成功できません。カリ・ユガにいる現代人は、努力しさえすればいいと考え、至高主の恩恵が必要なわけではない、と言います。インド人のある有名なサンニャーシーでさえ、シカゴで演説をしたときに至高主の恩恵を否定していました。しかしヴェーダやシャーストラの見解は違います。『シュリーマド・バーガヴァタム』には、成功できるのは主の許可次第である、と書かれています。マハーラージャ・ユディシュティラは、自分が成功したのも主のおかげであることを真実として認めており、私たちも人生を完璧な成功に導くためにも、偉大な献愛者や主の献愛者の足跡に従わなくてはなりません。主の許可がなくても成功できるのであれば、医者はどうな患者でも治せるはずです。最新の医学を使って苦しんでいる患者を治そうとしても、死は避けられないし、助からないと思われていた患者が、とくに治療もしていないのに生きのびて驚かされることがあります。ですから結論として言えるのは、神の許可こそが、善悪すべての直接の原因だということです。成功した人は、主の助けがあったからこそ富を得たのだ、と確信し、主に感謝しなくてはなりません。

第10節

पश्योत्पातान्नरव्याघ्र दिव्यान् भौमान् सदैहिकान् ।
दारुणान् शंसतोऽदूराद्भयं नो बुद्धिमोहनम् ॥ १० ॥

paśyotpātān nara-vyāghra
divyān bhaumān sadaihikān
dāruṇān śamsato 'dūrād
bhayam no buddhi-mohanam

paśya—見よ; *utpātān*—妨害; *nara-vyāghra*—おお、虎に匹敵する力を持つ者よ; *divyān*—空で、あるいは天体の影響で起こっていること; *bhaumān*—地上での出来事; *sa-daihikān*—肉体と心で起こっている物事; *dāruṇān*—恐ろしく危険な; *śamsataḥ*—示している; *adūrāt*—近い将来に; *bhayam*—危険; *naḥ*—私達の; *buddhi*—知性; *mohanam*—惑わせている。

よく見るのだ、トラの力を持つ男よ。いま多発し、危険きわまる天体の影響、地球による反動、肉体の苦痛による苦しみは、私たちの知性を惑わせ、近い将来さらに迫ってくる危険の予告なのだ。

要旨解説

物質文明の発達とは、天体による影響、地球による反動、肉体・心理的苦痛による三重の苦しみの反動がさらに高まることを意味しています。宇宙の星々の影響で、酷暑、酷寒、雨、ひでり、そのあとの飢饉、病気、疫病など、数多くの災難が発生します。それらの災難が合わさって、体と心の苦悩となって私たちを苦しめます。人間が作った物質科学では、このような三重の苦しみにはまったく太刀打ちできません。これらの苦しみは、至高主に動かされているマヤーという優位のエネルギーによる罰です。ですから、献愛奉仕をとおして主と絶えずふれあっている献愛者は、人としての義務をはたしているからこそ、乱されることのない穏やかな境地にいつづけることができます。しかし、神の存在を信じないアスラたちは、三重の苦しみを止めるためにさまざまな計画をたて、そのたびに失敗に直面しています。『バガヴァッド・ギーター』（第7章・第14節）は、三様式という避けられない力のために、物質エネルギーの反動にはぜったいに対抗できない、と明言しています。しかし、主の蓮華の御足にすがって奉仕に没頭している人は、その力をいともたやすく克服することができます。

第11節

ऊर्वक्षिबाहवो मह्यं स्फुरन्त्यरा पुनः पुनः ।
वेपथुश्चापि हृदये आराद्दास्यन्ति विप्रियम् ॥ ११ ॥

*ūrv-akṣi-bāhavo mahyam
sphuranty aṅga punaḥ punaḥ
vepathuś cāpi hṛdaye
ārād dāsyanti vipriyam*

ūru—太もも; *akṣi*—目; *bāhavaḥ*—腕; *mahyam*—私の内の; *sphuranti*—震えている; *aṅga*—体の左側; *punaḥ punaḥ*—何度も何度も; *vepathuḥ*—鼓動; *ca*—もまた; *api*—確かに; *hṛdaye*—心臓の中の; *ārāt*—恐れのために; *dāsyanti*—示している; *vipriyam*—望ましくない物事。

私の体の左側、腿（もも）、腕、目は、震えつづけている。あまりの恐ろしさに心臓が激しく鼓動している。どれも、これから望ましくないことが起こる前触れなのだ。

要旨解説

物質存在は、望ましくないものが渦巻く世界です。私たちを凌ぐ力によって、望んでもいなくて私たちに強いられるのですが、そのような不吉なできごとが物質自然界の三様式の手によって起こっていることが私たちには見えません。目、腕、太ももが震えつづけ

ているのは、これからなにか不吉なできごとが起こる前兆であると理解しなくてはなりません。このような望ましくない物事は山火事にたとえられています。だれかが山に入って火をつけたわけでもないのに、自然に火が発生し、森に住む生き物たちは思いもよらない災禍にみまわれるのです。その火は、人間の努力で消せるものではありません。消せるのは主の慈悲だけです——森に水を注ぐために雲を送るのです。同じように、人生の不吉なできごとは、どれほど計画を練っても止められません。主の慈悲だけが救いです。主は人類を目覚めさせるために本物の代表者を送り、その慈悲だけによって苦しみは取りのぞかれ、すべての災難から救われるのです。

第 1 2 節

शिवैषोद्यन्तमादित्यमभिरौत्यनलानना ।
माम्ना सारमेयोऽयमभिरेभत्यभीरुवत् ॥ १२ ॥

*śivaiṣodyantam ādityam
abhirauty analānanā
mām aṅga sārameyo 'yam
abhirebhaty abhīruvat*

śivā—ジャッカル; *eṣā*—これ; *udyantam*—昇っている; *ādityam*—太陽に; *abhi*—～に向かつて; *rauti*—泣き叫んでいる; *anala*—火; *ānanā*—顔; *mām*—私に; *aṅga*—おおビーマよ; *sārameyaḥ*—犬; *ayam*—これ; *abhirebhati*—～に吠えかかる; *abhīru-vat*—恐れることなく。

ビーマ、よく見よ。日の出にむかって雌のジャッカルが口から火を吐きながら吼え、犬はおじけることなく私に牙をむいて吠えかかっている。

要旨解説

これらが、将来起こるだろう不吉な兆しをほのめかしています。

第 1 3 節

शस्ताः कुर्वन्ति मां सव्यं दक्षिणं पशवोऽपरे ।
वाहांश्च पुरुषव्याघ्र लक्षये रुदतो मम ॥ १३ ॥

*śastāḥ kurvanti mām savyam
dakṣiṇam paśavo 'pare
vāhāṁś ca puruṣa-vyāghra
lakṣaye rudato mama*

śastāḥ—牛のような有益な動物達; kurvanti—留まっている; mām—私を; savyam—左側; dakṣiṇam—回っている; paśavaḥ apare—ロバのような他の下等な動物達; vāhān—馬（運搬者）; ca—もまた; puruṣa-vyāghra—人間の中の虎よ; lakṣaye—私は見ている; rudataḥ—泣いている; mama—私のもの。

ビーマよ、人類のなかの虎よ。いま、牛のような価値ある動物たちが私の左側をとおり、ロバのような下等な動物らが私のまわりを回っている。私の馬は、この様子を見て涙を流している。

第 1 4 節

मृत्युदूतः कपोतोऽयमुलूकः कम्पयन् मनः ।
प्रत्युलूकश्च कुह्वानैर्विश्वं वैशून्यमिच्छतः ॥ १४ ॥

mṛtyu-dūtaḥ kaṇoto 'yam
ulūkaḥ kampayan manaḥ
pratyulūkaś ca kuhvānair
viśvaṁ vai śūnyam icchataḥ

mṛtyu—死; dūtaḥ—～の使者; kaṇotaḥ—ハト; ayam—この; ulūkaḥ—フクロウ; kampayan—震えている; manaḥ—心; pratyulūkaḥ—フクロウの競争相手（カラス）; ca—そして; kuhvānaiḥ—けたたましい叫び声; viśvam—宇宙; vai—どちらも; śūnyam—空虚; icchataḥ—望んでいる。

見よ！ このハトはまるで死の使いのようではないか。フクロウ、そしてそのライバルのカラスたちのけたたましい叫び声が私の心を震えさせている。あたかも全宇宙を虚無の世界にしたがっているように見える。

第 1 5 節

धूम्रा दिशः परिधयः कम्पते भूः सहाद्रिभिः ।
निर्घातश्च महांस्तात साकं च स्तनयित्नुभिः ॥ १५ ॥

dhūmrā diśaḥ paridhayaḥ
kampate bhūḥ sahādrībhiḥ
nirghātaś ca mahāṁsta tāta
sākam ca stanayitnubhiḥ

dhūmrāḥ—煙い; *diśaḥ*—あらゆる方角; *paridhayaḥ*—包围; *kampate*—鼓動している; *bhūḥ*—地球; *saha adribhiḥ*—丘や山と共に; *nirghātaḥ*—青空からの稲妻; *ca*—もまた; *mahān*—非常に強烈な; *tāta*—おおビーマよ; *sākam*—～と共に; *ca*—もまた; *stanayitnubhiḥ*—雲のない雷の轟き。

雲が空を覆い隠している様を見よ。大地も山々も震えているようだ。雲のない雷、そして青空に光る稲妻を見よ。

第 16 節

वायुर्वति खरस्पर्शो रजसा विमृजंस्तमः ।
असृग् वर्षन्ति जलदा बीभत्समिव सर्वतः ॥ १६ ॥

vāyur vāti khara-sparśo
rajasā visṛjams tamaḥ
asṛg varṣanti jaladā
bībhatsam iva sarvataḥ

vāyuh—風; *vāti*—吹いている; *khara-sparśaḥ*—鋭く; *rajasā*—土ぼこりによって; *visṛjan*—作っている; *tamaḥ*—暗闇; *asṛk*—血; *varṣanti*—降らせている; *jaladāḥ*—雲; *bībhatsam*—悲惨な; *iva*—～のような; *sarvataḥ*—あらゆる場所に。

風が吹き荒れ、埃をそこかしこに巻きあげ、闇を作りだしている。雲はむごたらしい災難の雨を全世界に降らせている。

第 17 節

सूर्यं हतप्रभं पश्य ग्रहमर्दं मिथो दिवि ।
ससङ्कुलैर्भूतगणैर्ज्वलिते इव रोदसी ॥ १७ ॥

sūryam hata-prabham paśya
graha-mardam mitho divi
sasaṅkulair bhūta-gaṇair
jvalite iva rodasī

sūryam—太陽; *hata-prabham*—衰えているその光線; *paśya*—見よ; *graha-mardam*—星々の衝突; *mithaḥ*—互いに; *divi*—空で; *sa-saṅkulaiḥ*—～と混ざり合って; *bhūta-gaṇaiḥ*—生命体達

によって; *jvalite*—発火して; *iva*—~かのように; *rodasi*—泣いている。

太陽の光は衰え、星々は互いに争っているようだ。困惑した生命体たちがあたたかも火に焼かれ、そして泣いているように見える。

第 18 節

नद्यो नदाश्च क्षुभिताः सरांसि च मनांसि च ।
न ज्वलत्यग्निराज्येन कालोऽयं किं विधास्यति ॥ १८ ॥

nadyo nadāś ca kṣubhitāḥ
sarāṁsi ca manāṁsi ca
na jvalaty agnir ājyena
kālo 'yam kim vidhāsyati

nadyaḥ—川; *nadāḥ ca*—そして支流; *kṣubhitāḥ*—すべてが混乱して; *sarāṁsi*—貯水池; *ca*—そして; *manāṁsi*—心; *ca*—もまた; *na*—~しない; *jvalati*—火をつける; *agniḥ*—火; *ājyena*—バターのおかげで; *kālaḥ*—時期; *ayam*—異常な事態; *kim*—何; *vidhāsyati*—起こるだろう。

川、支流、池、湖、心、どれも混乱をきたしている。バターは火を作りだすこともない。なんという異常な時が来たのだ。なにが起ころうとしているのだろう。

第 19 節

न पिबन्ति स्तनं वत्सा न दुह्यन्ति च मातरः ।
रुदन्त्यश्रुमुखा गावो न हृष्यन्त्यृषभा व्रजे ॥ १९ ॥

na pibanti stanam vatsā
na duhyanti ca mātaraḥ
rudanty aśru-mukhā gāvo
na hr̥ṣyanty ṛṣabhā vraje

na—~しない; *pibanti*—吸う; *stanam*—乳房; *vatsāḥ*—仔牛; *na*—~しない; *duhyanti*—乳を絞ることを許す; *ca*—もまた; *mātaraḥ*—雌牛; *rudanti*—泣いている; *aśru-mukhāḥ*—涙にくれた顔で; *gāvaḥ*—牝牛; *na*—~しない; *hr̥ṣyanti*—喜びを感じる; *ṛṣabhāḥ*—雄牛; *vraje*—牧草地で。

仔牛は雌牛の乳首を吸おうとせず、雌牛も乳を与えようとしな。かれらは立ちつくし、泣きつづけ、目に涙をうかべ、雄牛たちは牧草地でたわむれることさえ楽しもうとしない。

第 2 0 節

दैवतानि रुदन्तीव स्विद्यन्ति ह्युच्चलन्ति च ।
इमे जनपदा ग्रामाः पुरोद्यानाकराश्रमाः ।
भ्रष्टश्रियो निरानन्दाः किमघं दर्शयन्ति नः ॥ २० ॥

*daivatāni rudantīva
svidyanti hy uccalanti ca
ime jana-padā grāmāḥ
purodyānākarāśramāḥ
bhraṣṭa-śriyo nirānandāḥ
kim agham darśayanti naḥ*

daivatāni—寺院の神像; *rudanti*—泣いているように見える; *iva*—そのように; *svidyanti*—汗をかいている; *hi*—確かに; *uccalanti*—あたかも出ていくかのように; *ca*—もまた; *ime*—これら; *jana-padāḥ*—都市; *grāmāḥ*—村; *pura*—町; *udyāna*—庭園; *ākara*—鋤山; *āśramāḥ*—庵など; *bhraṣṭa*—devoid of; *śriyaḥ*—beauty; *nirānandāḥ*—bereft of all happiness; *kim*—what sort of; *agham*—calamities; *darśayanti*—shall manifest; *naḥ*—to us.

神像は寺院で泣き、嘆き、そして汗を流しているように見える。そしていまも、その場から立ちさろうとしているようだ。都市、村、町、庭園、鋤山、庵など、どこも美しさを失い、幸せのきざしは消え失せてしまった。どのような災難が私たちが待ちうけているのか、私にはわからない。

第 2 1 節

मन्य एतेर्महोत्पातैर्नूनं भगवतः पदैः ।
अनन्यपुरुषश्रीभिर्हीना भूर्हतसौभगा ॥ २१ ॥

*manya etair mahotpātair
nūnam bhagavataḥ padaiḥ
ananya-puruṣa-śrībhir
hīnā bhūr hata-saubhagā*

manye—私は当然のことと思う; etaiḥ—これらすべてによって; mahā—偉大な; utpātaiḥ—高まり; nūnam—～の欠如のために; bhagavataḥ—人格主神の; padaiḥ—足の裏の印; ananya—異常な; puruṣa—最高人格者の; śribhiḥ—吉兆な印によって; hīnā—奪われて; bhūḥ—地球; hata-saubhagā—幸運がない。

思うに、地上に現われているこの混乱は、世界の幸運が大きくそこなわれる前兆なのだろう。世界は、主の蓮華の御足の跡が大地に残されていたからこそ幸運に恵まれていた。これらの兆しは、もうそのような幸運には見放されていくことをほのめかしている。

第 2 2 節

इति चिन्तयतस्तस्य दृष्टारिष्टेन चेतसा ।
राज्ञः प्रत्यागमद् ब्रह्मन् यदुपुर्याः कपिध्वजः ॥ २२ ॥

iti cintayatas tasya
dṛṣṭāriṣṭena cetasā
rājñāḥ pratiyāgamad brahman
yadu-puryāḥ kapi-dhvajaḥ

iti—このように; cintayataḥ—自分で考えていたとき; tasya—彼; dṛṣṭā—見ることで; ariṣṭena—不吉な兆し; cetasā—心で; rājñāḥ—王; prati—戻る; āgamat—来た; brahman—おお、ブラーフマナよ; yadu-puryāḥ—ヤドゥ家の王国から; kapi-dhvajaḥ—アルジュナ。

おお、ブラーフマナ・シャウナカよ。マハーラージャ・ユディシュティラが地上に不吉な兆しを見ながら、このように考えていたとき、アルジュナがヤドゥ家の都（ドウヴァーラカー）から帰還した。

第 2 3 節

तं पादयोर्निपतितमयथापूर्वमातुरम् ।
अधोवदनमब्बिन्दून् सृजन्तं नयनाब्जयोः ॥ २३ ॥

taṁ pādāyor nipatitam
ayathā-pūrvam āturam
adho-vadanam ab-bindūn
srjantaṁ nayanābjayoḥ

tam—彼（アルジュナ）を； pādayoḥ—その足に； nipatitam—お辞儀をしている；
ayathā-pūrvam—前例のない； āturam—失望して； adhaḥ-vadanam—うなだれた顔；
ap-bindūn—水のしずく； sṛjantam—作っている； nayana-abjayoḥ—蓮華のような目から。

王は、その足に向かってお辞儀をしたとき、それまで見たことのない失望がかれの顔に刻まれている様を見た。深くうなだれ、その蓮華の目からはとめどなく涙が流れている。

第 2 4 節

विलोक्योद्विग्रहदयो विच्छायमनुजं नृपः ।
पृच्छति स्म सुहृन्मध्ये संस्मरन्नारदेरितम् ॥ २४ ॥

vilokyodvigna-hṛdayo
vicchāyam anujam nṛpaḥ
pṛcchati sma suhṛn madhye
saṁsmaran nāraderitam

vilokya—見ることで； udvigna—不安； hṛdayaḥ—心； vicchāyam—青ざめた表情； anujam—アルジュナ； nṛpaḥ—王； pṛcchati sma—尋ねた； suhṛt—友人達； madhye—～の中で； saṁsmaran—思い出している； nārada—聖者ナーラダ； iritam—～で示されている。

苦渋と不安のために青ざめたアルジュナの表情を見た王は、聖者ナーラダの教えを思いだし、友人たちのまえで、アルジュナに尋ねた。

第 2 5 節

युधिष्ठिर उवाच
कच्चिदानर्तपुर्यां नः स्वजनाः सुखमासते ।
मधुभोजदशार्हर्हसात्वतान्धकवृष्णयः ॥ २५ ॥

yudhiṣṭhira uvāca
kaccid ānarta-puryām naḥ
sva-janāḥ sukham āsate
madhu-bhoja-daśārhārha-
sātvatāndhaka-vṛṣṇayah

yudhiṣṭhiraḥ uvāca—ユディシュティラが言った； kaccit—～かどうか； ānarta-puryām—ド

ウヴァーラカーの; *naḥ*—私達の; *sva-janāḥ*—親族達; *sukham*—幸せに; *āsate*—日々をすごしている; *madhu*—マドウ; *bhoja*—ボージャ; *daśārha*—ダシャールハ; *ārha*—アールハ; *sātvata*—サートウヴァタ; *andhaka*—アンダカ; *vṛṣṇayaḥ*—ヴリシュニ家の。

マハーラージャ・ユディシュティラが言う。「弟よ。マドウ、ボージャ、ダシャールハ、アールハ、サートウヴァタ、アンダカ、そしてヤドウ家の人々など、私の友人や親族たちは幸せに暮らしているのだろうか」

第26節

शूरो मातामहः कच्चित्स्वस्त्यास्ते वाथ मारिषः ।
मातुलः सानुजः कच्चित्कुशल्यानकदुन्दुभिः ॥ २६ ॥

śūro mātāmahaḥ kaccit
svasty āste vātha māriṣaḥ
mātulaḥ sānujaḥ kaccit
kuśaly ānakadundubhiḥ

śūraḥ—シューラセーナ; *mātāmahaḥ*—母方の祖父; *kaccit*—~かどうか; *svasti*—すべて順調な; *āste*—日々を過ごしている; *vā*—あるいは; *atha*—ゆえに; *māriṣaḥ*—尊い; *mātulaḥ*—母方の伯父; *sa-anujaḥ*—弟達と共に; *kaccit*—~かどうか; *kuśali*—全員が健康である; *ānaka-dundubhiḥ*—ヴァスデーヴァ。

私の高貴な祖父シューラセーナ様は安らかに暮らしておられるだろうか。そして、母方の伯父ヴァスデーヴァ様、弟の皆様は元気でおられるだろうか。

第27節

सप्त स्वसारस्तत्पत्न्यो मातुलान्यः सहात्मजाः ।
आसते सस्रुषाः क्षेमं देवकीप्रमुखाः स्वयम् ॥ २७ ॥

sapta sva-sāras tat-patnyo
mātulānyaḥ sahātmaajāḥ
āsate sasnuṣāḥ kṣemaṁ
devakī-pramukhāḥ svayam

sapta—7; *sva-sāraḥ*—自分の姉妹達; *tat-patnyaḥ*—彼の妻達; *mātulānyaḥ*—母方の叔母;

saha—～と共に; ātma-jāḥ—息子と孫達; āsate—～はすべて; sasnuṣāḥ—彼女達の義理の娘達;
kṣemam—幸福; devakī—デーヴァキー; pramukhāḥ—～を筆頭に; svayam—個人的に。

デーヴァキーをはじめとした7人の奥方たちは全員が姉妹だ。あの方たち、そしてご子息
たち、義理のご息女たちは、みな幸せに暮らしているのか。

第28－29節

कच्चिद्राजाहुको जीवत्यसत्पुत्रोऽस्य चानुजः ।
हृदीकः समुतोऽकूरो जयन्तगदसारणाः ॥ २८ ॥
आसते कुशलं कच्चिद्ये च शत्रुजिदादयः ।
कच्चिदास्ते सुखं रामो भगवान् सात्वतां प्रभुः ॥ २९ ॥

kaccid rājāhuko jīvaty
asat-putro 'sya cānujaḥ
hṛdīkaḥ sasuto 'krūro
jayanta-gada-sāraṇāḥ
āsate kuśalam kaccid
ye ca śatrujīd-ādayaḥ
kaccid āste sukham rāmo
bhagavān sātvatām prabhuḥ

kaccit—～かどうか; rājā—王; āhukaḥ—ウグラセーナの別名; jīvati—今でも生きている;
asat—邪悪な; putraḥ—息子; asya—彼の; ca—もまた; anujaḥ—弟; hṛdīkaḥ—フリディーカ;
sa-sutaḥ—息子クリタヴァルマーと共に; akrūraḥ—アクルーラ; jayanta—ジャヤンタ;
gada—ガダ; sāraṇāḥ—サーラナ; āsate—～は彼ら全員; kuśalam—幸福に; kaccit—～かどう
か; ye—彼ら; ca—もまた; śatrujīd—シャトウジトウ; ādayaḥ—～を筆頭に; kaccit—～かどう
か; āste—彼らは～か; sukham—順調な; rāmaḥ—バララーマ; bhagavān—人格主神;
sātvatām—献愛者の; prabhuḥ—保護者。

邪悪なカムサをご子息に持っておられたウグラセーナ様、そして弟様はいまでもご存命だ
ろうか。フリディーカと、その子クリヴァルマーは幸せだろうか。アクルーラ、ジャヤンタ、
ガダ、サーラナ、シャトウジトウの皆様は幸せに暮らしておられるだろうか。そして、人
格主神であり、献愛者を守る方バララーマはいかがお過ごしか？

要旨解説

パандаヴァ兄弟たちの都市ハスティナープラは、現在のニューデリー近郊にあり、ウグラセーナの王国はマトウラーにありました。アルジュナは、ドウヴァーラカーからデリーに戻るときにマトウラーを訪ねたはずですから、マトウラーの王についての質問には根拠があります。さまざまな親族の名前のなかでも、ラーマあるいはバララーマ、すなわち主クリシュナの兄は、ここで「人格主神」と呼ばれています。それは、主バララーマは、主クリシュナのプラカーシャ・ヴィグラハとしてのヴィシュヌ・タットウヴァの拡張体だからです。至高主は唯一絶対の方ですが、自分を他の無数の生命体に分身させました。ヴィシュヌ・タットウヴァ生命体は至高主の拡張体であり、そのすべてが主と質的にも量的にも同じです。しかし、ジーヴァ・シャクティの拡張体、つまりふつうの生命体と主とはまったく異なるカテゴリーです。ジーヴァ・シャクティとヴィシュヌ・タットウヴァを同じ段階ものとする者は、非難されてしかるべきです。シュリー・ラーマ、すなわちバララーマは主の献愛者の保護者です。バラデーヴァは献愛者たちの精神指導者として活動し、主のそのいわれのない慈悲によって墮落した魂たちが救われるのです。シュリー・バラデーヴァは、主チャイタンニヤが降誕したときシュリー・ニチャーナンダ・プラブとして現われ、そしてその偉大な主ニチャーナンダ・プラブは、ジャガーイとマーダーイというどうしようもなく墮落した二人の魂を救うことで、いわれのない慈悲をしめました。ですから、ここで特に述べられているように、バララーマは主の献愛者の保護者です。主の神聖な恩寵があつてこそ、私たちは至高主シュリー・クリシュナに近づくことができるのですから、シュリー・バララーマは主の慈悲の化身、精神指導者、純粋な献愛者を救う方です。

第30節

प्रद्युम्नः सर्ववृष्णीनां सुखमास्ते महारथः ।
गम्भीररयोऽनिरुद्धो वर्धते भगवानुत ॥ ३० ॥

*pradyumnaḥ sarva-vṛṣṇinām
sukham āste mahā-rathaḥ
gambhīra-rayo 'niruddho
vardhate bhagavān uta*

pradyumnaḥ—プラデムナ（主クリシュナの子）；*sarva*—すべて；*vṛṣṇinām*—ヴリシュヌ家の家族達の；*sukham*—幸福；*āste*—～にいる；*mahā-rathaḥ*—偉大な将軍；*gambhīra*—深く；*rayaḥ*—利口さ；*aniruddhaḥ*—ア Niludda（主クリシュナの孫）；*vardhate*—繁栄している；*bhagavān*—人格主神；*uta*—～に違いない。

ヴリシュニ家の偉大な将軍であるプラデムナ様はいかがおすごしか。幸せに暮らしておられるだろうか。人格主神の完全拡張体、アニルツダ様はつつがなくおすごしだろうか。

要旨解説

プラデムナとアニルツダも人格主神の拡張体ですから、どちらもヴィシュヌ・タットウヴァです。主ヴァースデーヴァはドウヴァーラカーで、自分の完全拡張体、すなわちサンカルシャナ、プラデムナ、アニルツダと超越的な娯楽を楽しんでおり、ここでアニルツダという名前と関連づけて述べられているように、全員が人格主神と呼ばれています。

第31節

सुषेणश्चारुदेष्णश्च साम्बो जाम्बवतीसुतः ।
अन्ये च कार्ष्णिप्रवराः सपुत्रा ऋषभादयः ॥ ३१ ॥

*suṣeṇaś cārudeṣṇaś ca
sāmbho jāmbavatī-sutaḥ
anye ca kārṣṇi-pravarāḥ
saputrā ṛṣabhādayaḥ*

suṣeṇaḥ—スシェーナ; *cārudeṣṇaḥ*—チャールデーシュナ; *ca*—そして; *sāmbaḥ*—サーンバ; *jāmbavatī-sutaḥ*—ジャンバヴァティーの子; *anye*—他の者達; *ca*—もまた; *kārṣṇi*—主クリシュナの子ども達; *pravarāḥ*—全員が指導者; *sa-putrāḥ*—彼らの子ども達と共に; *ṛṣabha*—リシャバ; *ādayaḥ*—～など。

主クリシュナの主要な子たち、スシェーナ、チャールデーシュナ、ジャンバヴァティーの子サーンバ、リシャバ、そしてかれらの子どもたちは全員すこやかに暮らしているだろうか。

要旨解説

すでに述べられたように、主クリシュナは16,108人の女性と結婚し、それぞれ10人の子をもうけています。つまり、 $16,108 \times 10 = 161,080$ 人の子がいるということになります。それぞれ成長し、さらに父親となって多くの子をもうけ、主には総勢1,610,800人ちかくの家族がいたことになります。主は全生命体の父親であり、その数は計りしれません。ですから、そのなかの数人だけが、地上にあるドウヴァーラカーの主としての崇高な娯楽で交流者になったのです。主がそれほどの家族を目に見える形で維持していたとしても、とくに驚く

べきことではありません。主の立場と私たちの立場を比べないように心がけるべきであり、少なくとも主の超越的な立場を少しでも理解すれば、私たちはそのことを簡単明瞭な真理として悟ることができます。ユディシュティラ王は、ドウヴァーラカーにいる主の子どもや孫たちについて尋ねましたが、とりわけ主要な名前だけを挙げています。その家族の構成員全員の名前を思い出すのはどうもできないことだったからです。

第 3 2 – 3 3 節

तथैवानुचराः शौरेः श्रुतदेवोद्धवादयः ।
 मुनन्दनन्दशीर्षण्या ये चान्ये सात्वतर्षभाः ॥ ३२ ॥
 अपि स्वस्त्यासते सर्वे रामकृष्णभुजाश्रयाः ।
 अपि स्मरन्ति कुशलमस्माकं बद्धसौहृदाः ॥ ३३ ॥

tathaiivānucarāḥ śaureḥ
 śrutadevoddhavādayaḥ
 sunanda-nanda-śīrṣaṇyā
 ye cānye sātvarṣabhāḥ
 api svasty āsate sarve
 rāma-kṛṣṇa-bhujāśrayāḥ
 api smaranti kuśalam
 asmākam baddha-sauhṛdāḥ

tathā eva—同様に; anucarāḥ—絶えず共にいる者; śaureḥ—〜といった、主シュリー・クリシュナの; śrutadeva—シュルタデーヴァ; uddhava-ādayaḥ—ウッダヴァ、そして他の者達; sunanda—スナンダ; nanda—ナンダ; śīrṣaṇyāḥ—他の指導者達; ye—彼ら全員; ca—そして; anye—他の者達; sātvara—解放された魂達; ṛṣabhāḥ—最善の者達; api—〜かどうか; svasti—健康に暮らしている; āsate—〜である; sarve—彼ら全員; rāma—バララーマ; kṛṣṇa—主クリシュナ; bhujā-āśrayāḥ—〜の保護下で; api—も〜かどうか; smaranti—思い出す; kuśalam—幸福; asmākam—私達について; baddha-sauhṛdāḥ—永遠の友人関係に縛られて。

そして、シュルタデーヴァ、ウッダヴァ、そして主といつも行動をともにするナンダ、スナンダのような解放された魂たちは主バララーマとクリシュナに守られている。かれらは、それぞれの職務を首尾よくこなしているだろうか。私たちとの友人としての絆で永遠に結ばれているかれらは、私たちが幸せかどうか思ってくれているだろうか。

要旨解説

ウッダヴァのような、主との変わらぬ仲間たちは全員が解放された魂であり、主クリシュナの使命を実現させるために、主といっしょに物質界に降誕します。パーンダヴァ兄弟も解放された魂であり、地上で主の崇高な娯楽をとおして主クリシュナに仕えるためにともに降誕しました。『バガヴァッド・ギーター』（第4章・第8節）で言われているように、主と、そして主と同じように解放された魂である交流者たちは、特定の間隔をおいて地球に降りてきます。主はかれらをすべて覚えているのですが、主の交流者たちは、解放された魂ではあっても、タタシュタ・シャクティ (*tatasthā śakti*・主の中間エネルギー) という立場ゆえに忘れてしまいます。それが、ヴィシュヌ・タットウヴァとジーヴァ・タットウヴァの違いです。ジーヴァ・タットウヴァは主の極小の、そして力をそなえた部分体であり、そのため、いつでも主に守られなくてはならない立場にいます。そして主は、そのような永遠な召使いをいつでも喜んで守ろうとします。ですから、解放された魂は、自分を主のように自由な身であるとか、主と同じ力を持っているとは考えませんし、どのような状況におかれても主の保護を求めようとする。主に頼ろうとするこの解放された魂の思いは、魂そのものが本来そなえているものです。解放された魂は火本体から出る火の粉のようなものであり、それは、火から離れているのではなく、火とともにありさえすればその火の輝きを同じように表わすことができるからです。火本体から離れてしまった火の粉は、火の質はそなえていてもやがて消えてしまいます。ですから、主の保護を拒否し、あるいは自分が主になってしまう者たちは、厳しく長いタパッシャをしても、精神的本質を知らないために、この物質界にふたたびもどってきます。それが、すべてのヴェーダ經典の意見です。

第34節

भगवानपि गोविन्दो ब्रह्मण्यो भक्तवत्सलः ।
कच्चित्पुरे सुधर्मायां सुखमास्ते सुहृद्वृतः ॥ ३४ ॥

bhagavān api govindo
brahmaṇyo bhakta-vatsalaḥ
kaccit pure sudharmāyām
sukham āste suhṛd-vṛtaḥ

bhagavān—人格主神、クリシュナ; *api*—もまた; *govindaḥ*—牛、感覚を活気づける者; *brahmaṇyaḥ*—ブラーフマナ献愛者を強く愛して; *bhakta-vatsalaḥ*—献愛者に優しい; *kaccit*—〜かどうか; *pure*—ドウヴァーラカー・プリーで; *sudharmāyām*—敬虔な集まり; *sukham*—幸福; *āste*—楽しむ; *suhṛt-vṛtaḥ*—友人達に囲まれて。

主クリシュナ、最高人格主神、そして牛と感覚とブラーフマナに喜びを与える方、さらに自分の献愛者を深くいつくしむ方は、友人たちに囲まれて、ドウヴァーラカーに住む敬虔な人々とのつどいを楽しんでおられるのだろうか。

要旨解説

主はこの特別の節で、バガヴァーン、ゴーヴィンダ、ブラフマニヤ、バクタ・ヴァトウサラという名前と呼ばれています。主は**bhagavān svayam** (バハガヴァーン スヴァヤンム)、根源の最高人格主神であり、すべての富、すべての力、すべての知識、すべての美しさ、すべての名声、すべての放棄心をそなえた方です。主に等しく、そして優る者はいません。主は牛と感覚に喜びを与えるため、その名をゴーヴィンダといいます。主への献愛奉仕をとおして感覚を純粹にした人は、主にほんとうの奉仕を捧げることができ、その純粹になった感覚から超越的な喜びを感じることができます。純粹ではなく、条件づけられた生命体だけが、感覚からまったく喜びを得ることができず、まちがった感覚の喜びに惑わされているため、感覚の召使いになっています。ですから私たちは、自分の利益のためにも主に守られなくてはなりません。主は牛とブラーフマナの文化を守る方です。牛もブラーフマナ文化も守られていない社会は主に直接守られることはなく、それは、刑務所にいる囚人たちは王に守られているのではなく、王の冷酷な代理人に守られている状態と同じです。社会のなかで牛が守られる、少なくとも社会の一部でブラーフマナの気質の修養されていなければ、人間文化は少しも繁栄することはできません。ブラーフマナの文化をとおして眠っている徳の気質、すなわち誠実さ、平静さ、感覚の抑制、忍耐心、率直さ、一般的知識、超越的知識、ヴェーダの知恵に対する堅い信念が高まることでブラーフマナになり、主をありのままに見ることができるようになります。そして、ブラーフマナとしての完成の境地を得たあとに主の献愛者になり、所有者、主人、友人、息子、愛する者という姿をとおして、主の愛情を手に入れることができます。主の超越的な愛情を引きつけることのできる献愛者の境地は、上記のようなブラーフマナの質を高めてこそ得られるものです。主が惹かれるのはブラーフマナの気質であって、偽の名声ではありません。ブラーフマナよりも劣る質を持つ人は、主とどのような関係も築くことはできません。それは、木と土には関係があっても、木がなければ土だけで火をおこすことができない状況と同じです。主はみずからのうちで完璧な方ですから、主が幸せかどうかを尋ねる必要はなく、マハーラージャ・ユディシュティラもそのような質問はしていません。だから、主が住んでいる場所、つまりドウヴァーラカー・プリーという敬虔な人々が集まっている場所について尋ねているのです。主は、敬虔な人々がつどうところにしかいませんし、至高の真理が讃えられるところにいることに喜びを感じます。マハーラージャ・ユディシュティラは、ドウヴァーラカーの都に住む敬虔な人々のこと、そしてかれらの行ないについて知りたがっていたのです。

第 35 – 36 節

मृगलाय च लोकानां क्षेमाय च भवाय च ।
आस्ते यदुकुलाम्बोधवाद्योऽनन्तसखः पुमान् ॥ ३५ ॥
यद्बाहुदण्डगुप्तायां स्वपुर्यां यदवोऽर्चिताः ।
क्रीडन्ति परमानन्दं महापौरुषिका इव ॥ ३६ ॥

*maṅgalāya ca lokānām
kṣemāya ca bhavāya ca
āste yadu-kulāmbhodhāv
ādyo 'nanta-sakhaḥ pumān

yad bāhu-daṇḍa-guṭṭāyām
sva-puryām yadavo 'rcitāḥ
krīḍanti paramānandaṁ
mahā-pauruṣikā iva*

maṅgalāya—あらゆる善のために; *ca*—もまた; *lokānām*—全惑星の; *kṣemāya*—保護のために; *ca*—そして; *bhavāya*—高まりのために; *ca*—もまた; *āste*—そこにいる; *yadu-kula-ambhodhau*—ヤドゥ王家という海の中に; *ādyaḥ*—根源の方; *ananta-sakhaḥ*—アナンタ（バララーマ）との集まりの中で; *pumān*—至上の享樂者; *yat*—誰のもの; *bāhu-daṇḍa-guṭṭāyām*—主の軍隊に守られて; *sva-puryām*—主の都市の中で; *yadavaḥ*—ヤドゥ王家の人々; *arcitāḥ*—彼らはその価値がある; *krīḍanti*—味わっている; *parama-ānandaṁ*—超越的な喜び; *mahā-pauruṣikāḥ*—精神界の住民達; *iva*—~のように。

根源の人格主神である享樂者、そして原初の主アナンタであるバララーマは、全宇宙の幸福、保護、普遍的な発達のために、ヤドゥ王家という海にとどまっておられる。そしてヤドゥ王家の人々は、主の軍隊に守られているため、精神界の住人のように生活を楽しんでいる。

要旨解説

これまでなんども話しあってきたように、人格主神ヴィシュヌは、ガルボーダカシャーイー・ヴィシュヌとクシーローダカシャーイー・ヴィシュヌという2つの能力ですべての宇宙のなかに住んでいます。クシーローダカシャーイー・ヴィシュヌは宇宙の北側の頂点に自分の惑星を持っており、巨大な乳海に浮かぶバラデーヴァの化身アナンタのベッドの上に住んでいます。そのことからマハーラージャ・ユディシュティラは、ヤドゥ王家を乳海と、そしてシュリー・バラデーヴァを主クリシュナが住んでいるアナンタと比較しています。私たち

が自分の目で見られる物質界をはるかに超えたところに、そして宇宙の7層の覆いを超えたところに原因の海があり、そこにフットボールのような形をしたすべての宇宙が浮かび、その原因の海を越えたところに、ブラフマンの光輝として一般的に知られている無限の精神界があります。この光輝のなかには無数の精神的惑星が存在し、ヴァイクンタ惑星として知られています。そのヴァイクンタ惑星すべては、物質界にある最大の宇宙よりも遙かに巨大で、そのそれぞれに、主ヴィシュヌとまったく同じ姿をした無数の住民たちが住んでいます。その住人たちはマハー・パウルシカ (Mahā-pauruṣika)、すなわち主の奉仕に直接従事している人々、と呼ばれています。かれらはそれらの惑星のなかで幸せに暮らしており、苦しみもなく、完全な若々しさで永遠に住み、喜びと知識に満ち、誕生・死・老年・病気のない、そしてカーラ・永遠の時に影響されずに生活を満喫しています。マハーラージャ・ユディシュティラは、ドウヴァーラカーの住人をヴァイクンタにいるマハー・パウルシカと比較していますが、それはかれらが主と幸せに生きているからです。『バガヴァッド・ギーター』にはヴァイクンタローカについて多く記述されており、そこではマドウ・ダーマ (mad-dhāma)、主の王国と述べられています。

第37節

यत्पादशुश्रूषणमुख्यकर्मणा
 सत्यादयो द्व्यष्टसहस्रयोषितः ।
 निर्जित्य संख्ये त्रिदशांस्तदाशिषो
 हरन्ति वज्रायुधवल्गुभोचिताः ॥ ३७ ॥

yat-pāda-śuśrūṣaṇa-mukhya-karmaṇā
 satyādayo dvy-aṣṭa-sahasra-yoṣitaḥ
 nirjitya saṅkhye tri-daśāms tad-āśiṣo
 haranti vajrāyudha-vallabhocitāḥ

yat—～である者の; pāda—足; śuśrūṣaṇa—快適さの管理; mukhya—もっとも重要なこと; karmaṇā—～の行動によって; satya-ādayaḥ—サテャバーマーを筆頭とする女王達; dvi-aṣṭa—8の2倍; sahasra—1000; yoṣitaḥ—その女性; nirjitya—征服することで; saṅkhye—戦場で; tri-daśān—天国の住人達の; tat-āśiṣaḥ—半神達によって楽しまれるもの; haranti—取りさる; vajra-āyudha-vallabhā—雷を支配する人物の妻達; ucitāḥ—価値がある。

サテャバーマーを筆頭とするドウヴァーラカーの女王たちは、すべての奉仕のなかでもっとも重要な「主の蓮華の御足を快適に保つこと」だけで、半神を打ち破るよう主に求めた。こうしてかのじよたちは、雷の支配者の妻たちに与えられた特権を楽しんだのである。

要旨解説

サチャバーマー (Saryabhāmā) ドウヴァーラカーにおける主シュリー・クリシュナの主要な女王の一人。主クリシュナはナラカースラを殺したあと、サチャバーマーを伴ってナラカースラの宮殿を訪ねました。またともにインドラローカにも行き、シャチーデーヴィーに迎えられ、シャチーデーヴィーは半神たちの母であるアディティにサチャバーマーを紹介しました。アディティはサチャバーマーをたいそう気に入り、主クリシュナが地上にとどまっているかぎり、永遠に若さを保っていただける恩恵を授けました。またアディティはかのじよを、天界の惑星の半神たちが持つ特権を見せるために案内します。サチャバーマーは天界に咲くパーリジャータの花を見たとき、それをドウヴァーラカーにある自分の宮殿に持ち帰りたいと思いました。ドウヴァーラカーに戻ったかのじよは、自分の宮殿にパーリジャータの花を咲かせたいと夫にねだります。その宮殿は高価な宝石で飾られ、焼けつくような夏のあいだでも、まるで冷房がきいているかのように宮殿内部は涼しく保たれていました。かのじよは、すばらしい夫がここにいることを告げるかのように宮殿をさまざまな旗で飾りました。あるとき、夫とともにドウラウバディーと会い、どうすれば夫を喜ばせられるかドウラウバディーから学びたいと思いました。ドウラウバディーはそのことにたいへん精通していた女性です。なんとといっても、5人の夫、つまりパーンダヴァ兄弟という夫たちを持ち、そのだれもがドウラウバディーに心から満足していたからです。ドウラウバディーの教えを授かったかのじよはとても喜び、心からの祝福を贈り、ドウヴァーラカーに戻っていきました。サチャバーマーはサトゥラージトウの娘です。主クリシュナが他界したあと、アルジュナがドウヴァーラカーを訪ねたとき、サチャバーマーやルクミニーを含むすべての女王たちは主を思って深く嘆き悲しみました。人生の終焉を迎えるときには、厳しい苦行をするために森に入っていました。

サチャバーマーは天界の惑星からパーリジャータの花を持ってきてくれるよう夫にせがみ、そして主は、ありきたりの夫として妻を喜ばせるために品物を手にいれるために、半神たちから無理やり奪い取りました。すでに説明したことですが、主は、多くの妻たちがなにかを言いつけても、ふつうの男性のようにそれを叶えてあげることにとくに頓着しているわけではありません。しかし、女王たちが優れた献愛奉仕をし、主がどんな状況でも快適に暮らせるように気を遣ってしてくれたからこそ、忠実で申し分のない夫として役割を演じていました。地球に住む人間が天界からなにかを手に入れることなど、とくに半神だけが使っているパーリジャータの花を手に入れることなどありえないことです。それでも、女王たちは忠実な妻として仕えていたからこそ、天界の住人の偉大な妻の特権を楽しむことができました。言いかえれば、主は自分が作った創造界にあるものすべての所有者ですから、ドウヴァーラカーの女王たちには、宇宙のどこからであろうと、ひじょうに珍しいものを手にいれることなど、とくに驚くことでもなかったのです。

第38節

यद्बाहुदण्डाभ्युदयानुजीविनो
यदुप्रवीरा ह्यकुतोभया मुहुः ।
अधिक्रमन्त्यङ्घ्रिभिराहतां बलात्
सभां सुधर्मा सुरसत्तमोचिताम् ॥ ३८ ॥

yad bāhu-daṇḍābhyudayānujīvinō
yadu-pravīrā hy akutobhayā muhuḥ
adhikramanty aṅghribhir āhṛtām balāt
sabhām sudharmām sura-sattamocitām

yat—～である者の; bāhu-daṇḍa—軍隊; abhyudaya—～に影響されて; anujīvinah—いつも住んでいる; yadu—ヤドゥ王家の人々; pravīrah—偉大な英雄達; hi akutobhayāḥ—あらゆる状況でも恐れのない; muhuḥ—絶えず; adhikramanti—旅している; aṅghribhiḥ—足で; āhṛtām—もたらした; balāt—力づくで; sabhām—集会堂; sudharmām—スダルマー; sura-sat-tama—半神達の中の最善者; ucitām—～に値する。

ヤドゥ王家のもっとも気高い英雄たちは、主シュリー・クリシュナの軍隊に守られていたために、どのような状況にあっても恐れることはなかった。だからこそかれらの足は、頂点の半神たちにふさわしかったスダルマー集会堂の地を踏むことができたのであり、そしてかれらの手から奪いとったのである。

要旨解説

主に直接仕える人々はどのような恐怖からでも主に守られており、力づくで集められた品々であっても、その最善の質を楽しみます。主はすべての生命体と等しく接する方ですが、とりわけ純粋な献愛者には強い愛情を感じていますから、かれらを大切にします。ドゥヴァーラーカーの都は、物質界で最高の質をそなえたもので富んでいたため、繁栄をきわめていました。ここで言われている国の集会堂は、特定の国の品位にもとづいて建てられています。天界の惑星にあるその集会堂をスダルマーといい、最高位の半神の品位にふさわしいものとされています。そのような集会堂は地上の国々とはまったく無縁の建物です。地球の人間は、どれほど国が物質的に繁栄していてもそのような建築物を作ることはできないからです。ところがヤドゥ王家の人々は、主クリシュナが地上にいたときその天界の集会堂を力づくで地球に取り寄せ、ドゥヴァーラーカーに設置しました。かれらがそのような力を行使できたのは、至高主クリシュナが自分たちに寛大であること、自分たちを守っていることを確信していた

からです。言いかえれば、主は純粋な献愛者から宇宙でもっとも優れたものを提供される、ということです。主クリシュナは、ヤドゥ王家の人々から宇宙で手に入る快適な環境と便宜をすべて提供されていたのであり、その返礼として主の召使いたちは守られ、恐れることなく暮らすことができたのです。

すべてを忘れ、条件づけられた魂は恐れを感じています。しかし、解放された魂はぜったいに恐れません。父親の慈悲に完全にすがっている小さな子がだれも怖がらないのと同じです。眠っている状態にあり、主との永遠な絆を忘れている生命体にとって、恐れとは一種の幻想です。『バガヴァッド・ギーター』（第2章・第20節）で言われているように、生命体は決して死なないので、恐れる理由などどこにもありません。ある人が虎の夢を見て怖がっているとしても、起きて横にいる人は、虎を見ているわけではありません。虎は、夢を見ている人、目覚めている人どちらにも架空の存在です。ほんとうは虎などどこにもいないのですから。しかし、目覚めているときのことを忘れている人には恐怖そのものであり、いっぽう、自分本来の立場を忘れていない人にはどこにも恐怖は存在しません。ヤドゥ王家の人々は主への奉仕をとおして完全に目覚めていますから、どのような状況でも、恐ろしい虎はいませんでした。またたとえほんとうの虎がいたとしても、主はそこでかれらを守ってくれていたのです。

第39節

कच्चित्तेऽनामयं तात भ्रष्टतेजा विभासि मे ।
अलब्धमानोऽवज्ञातः किं वा तात चिरोषितः ॥ ३९ ॥

*kaccit te 'nāmayam tāta
bhraṣṭa-tejā vibhāsi me
alabdha-māno 'vajñātaḥ
kim vā tāta ciroṣitaḥ*

kaccit—〜かどうか; *te*—あなたの; *anāmayam*—健康である; *tāta*—弟よ; *bhraṣṭa*—失って; *tejāḥ*—輝き; *vibhāsi*—〜に見える; *me*—私にとって; *alabdha-mānaḥ*—敬意がない; *avajñātaḥ*—無視されて; *kim*—〜かどうか; *vā*—または; *tāta*—尾当とよ; *ciroṣitaḥ*—長期の住居ゆえに。

弟よ、アルジュナよ、いま健康かどうか教えてくれ。私には、おまえが体の輝きを失っているように見えるのだ。ドウヴァーラカーに長くいたために、人から無礼を受けたり無視されたりしたのか。

要旨解説

マハーラージャはあらゆる角度からアルジュナにドウヴァーラーカーの福利について尋ねましたが、最後は、主シュリー・クリシュナがそこにいるかぎり、不吉なことなど起こるはずがない断定しました。しかし同時に、アルジュナがかれ本来の体の輝きを失ったように思えたため、アルジュナの個人的な幸せについて、そして多くの重要な質問をしています。

第40節

कच्चिन्नाभिहतोऽभावेः शब्दादिभिरमृगलैः ।
न दत्तमुक्तमर्थिभ्य आशया यत्प्रतिश्रुतम् ॥ ४० ॥

kaccin nābhihato 'bhāvaiḥ
śabdādibhir amaṅgalaiḥ
na dattam uktam arthibhya
āśayā yat pratiśrutam

kaccit—〜かどうか; *na*—できなかった; *abhihataḥ*—〜に呼ばれた; *abhāvaiḥ*—不親切に; *śabda-ādibhiḥ*—音によって; *amaṅgalaiḥ*—不吉な; *na*—しなかった; *dattam*—慈善を施す; *uktam*—言われて; *arthibhyaḥ*—頼んだ者に; *āśayā*—希望と共に; *yat*—何; *pratiśrutam*—払うべき約束。

だれかが冷たい言葉をおまえにかけたのか、それともおまえを脅したのか。慈善を乞うた者に応えられなかったのか、あるいはだれかとの約束を破ったとでもいうのか。

要旨解説

クシャトリーヤや裕福な人は、金銭を必要としている人たちの訪問を受けることがあります。財産を持つ人は、寄付を乞われるとき、相手、場所、時間を考慮したうえで応えなくてはなりません。クシャトリーヤや裕福な人物がこの義務をまっとうできなければ、そのような言動の不一致を悔やむはずです。同じように、慈善を施す約束を破ってはなりません。このような不一致はときに失望の原因となり、義務がまっとうできなかった人が非難されることがあり、これがアルジュナの苦境の原因だったのかもしれない。

第41節

कच्चित्त्वं ब्राह्मणं बालं गां वृद्धं रोगिणं स्त्रियम् ।
शरणोपमृतं सत्त्वं नात्याक्षीः शरणप्रदः ॥ ४१ ॥

*kaccit tvam brāhmaṇam bālam
gām vṛddham rogiṇam striyam
śaraṇopasṛtam sattvam
nātyākṣiḥ śaraṇa-pradaḥ*

kaccit—～かどうか; *tvam*—あなた自身; *brāhmaṇam*—ブラーフマナ達; *bālam*—子ども; *gām*—牛; *vṛddham*—年老いた; *rogiṇam*—病人; *striyam*—女性; *śaraṇa-upasṛtam*—助けを求められて; *sattvam*—どの生命体も; *na*—～かどうか; *atyākṣiḥ*—庇護を与えずに; *śaraṇa-pradaḥ*—保護されるに値する。

おまえはいつも、ブラーフマナ、子ども、牛、女性、そして病人など、守られるべき者たちを守ってきた。そんなかれらがおまえに救いを求めてきたとき、それができなかったのだろうか。

要旨解説

ブラーフマナは、社会が物質的にも精神的にも幸せになれるよう、いつも知識を高めようとしている人々ですから、あらゆる面で国王の保護を受ける資格をそなえています。同じように、国内の子ども、牛、病人、女性、老人などはとくに、国からの、あるいはクシャトリヤの国王の保護が必要です。仮に、そのような生命体たちがクシャトリヤ、王家、国家によって守られなければ、それはクシャトリヤや国にとってじつに恥ずべきことです。マハーラージャ・ユディシュティラは、アルジュナにそのような義務不履行がじっさいに起こったのではと案じ、アルジュナに尋ねました。

第42節

कच्चित्त्वं नागमोऽगम्यां गम्यां वासत्कृतां स्त्रियम् ।
पराजितो वाथ भवान्नोत्तमैर्नासमैः पथि ॥ ४२ ॥

*kaccit tvam nāgamo 'gamyām
gamyām vāsat-kṛtām striyam
parājito vātha bhavān
nottamair nāsamaiḥ pathi*

kaccit—～かどうか; *tvam*—あなた自身; *na*—ではない; *agamaḥ*—did contact; *agamyām*—impeachable; *gamyām*—acceptable; *vā*—either; *asat-kṛtām*—improperly treated; *striyam*—a woman; *parājitaḥ*—defeated by; *vā*—either; *atha*—after all; *bhavān*—your good self;

na—nor; *uttamaiḥ*—by superior power; na—not; *asamaiḥ*—by equals; *pathi*—on the road.

非難されてしかるべき女性とでも交わったのか、あるいはふさわしい女性を適切にもてなさかったのか。それとも、おまえよりも弱い者か同じ力を持つ者に破れたのか。

要旨解説

この節からは、パンドヴァ兄弟がいた当時は、男性と女性の自由な交わりは、ある一定の条件下だけで許されていたことがわかります。優れた家系、つまりブラーフマナとクシャトリヤの男性は、ヴァイシャあるいはシュードラ社会の女性を妻として迎えることができますが、身分が劣る男性は高い身分の女性と交わることはできませんでした。クシャトリヤの男性でも、ブラーフマナの女性と結ばれることはできません。ブラーフマナの妻は、7人の母（実母、精神指導者あるいは教師の妻、ブラーフマナの妻、国王の妻、牛、乳母、地球）の一人と考えられています。このような男女間の接触をウッタマ (*uttama*) あるいはアダマ (*adhama*) と言います。ブラーフマナの男性とクシャトリヤの女性の結びつきはウッタマですが、クシャトリヤの男性とブラーフマナの女性の関係はアダマとされ、非難の対象になります。女性から交際を求められた男性は拒否すべきではありませんが、同時に、上記のような状況も考慮されなくてはなりません。ビーマは、ヒディンビーというシュードラ以下の女性から接触を求められ、ヤヤーティはシュクラチャーリヤの娘との結婚を断りました。シュクラチャーリヤがブラーフマナだったからです。またブラーフマナだったヴァーサデーヴァはパンドウとドゥリタラーシュトラをもうけるために結婚を要請されました。サチャヴァティーは漁師の家の娘でしたが、偉大なブラーフマナであるパラシャラはサチャヴァティーとのあいだにヴァーサデーヴァをもうけています。このように、女性との交わりについては多くの例が残されていますが、いずれの場合でも忌まわしいものとなったり、その接触の結果が忌まわしいものになったりしたわけでもありません。男性と女性の交わりは自然なことですが、それは規定原則にもとづいてなされるべきであり、そうすれば、社会的な神聖な秩序が乱されることなく、また不必要で無価値な子孫が作られて世界が不安定になるのを避けることができます。

クシャトリヤが、力関係で劣るか等しい相手に負けるのは不名誉なことです。負けるとすれば、自分よりも優れた力量を持つ相手でなくてはなりません。アルジュナはビーシュマデーヴァに負けそうになったのですが、主クリシュナは、その窮地からアルジュナを救いました。しかし、そのことがアルジュナの名誉を傷つけたわけではありません。ビーシュマデーヴァは、年齢、尊さ、力など、あらゆる面でアルジュナよりも優れていた人物でした。いっぽうカルナはアルジュナと互角の力を持ち、そのためアルジュナはカルナとの戦いで窮地におちいりました。アルジュナは危機的状況に置かれ、そのために、カルナは不正な手段を使

ってできえ殺されなくてはなりませんでした。それはクシャトリヤのあいだでよく行なわれることで、だからこそマハーラージャ・ユディシュティラは弟に、ドウヴァーラカーから故郷に戻ってくる時、なにか望ましくないことが起こったのではないかと尋ねているのです。

第43節

अपि स्वित्पर्यभुंक्थास्त्वं सम्भोज्यान् वृद्धबालकान् ।
जुगुप्सितं कर्म किञ्चित्कृतवान्न यदक्षमम् ॥ ४३ ॥

*api svit parya-bhunkthās tvam
sambhojyān vṛddha-bālakān
jugupsitam karma kiñcit
kṛtavān na yad akṣamam*

api svit—もし〜そうだとしたら; *parya*—放置することで; *bhunkthāḥ*—食事をした; *tvam*—あなた自身; *sambhojyān*—共に食事をするにふさわしい; *vṛddha*—老人; *bālakān*—少年; *jugupsitam*—非道な; *karma*—行為; *kiñcit*—何か; *kṛtavān*—あなたはしたに違いない; *na*—ではない; *yat*—〜であるもの; *akṣamam*—許せない。

おまえと食事をもとにするべき老人や少年らを招かなかったのか。かれらを放っておいて、自分だけ食事をしたわけではないだろうな。あるいは、非道な許しがたいまちがいを犯してしまったわけではないのか。

要旨解説

世帯者なら、家族の子ども全員、そして老人、ブラーフマナ、病弱な人々に食事を提供する義務があります。さらに理想的な世帯者は、飢えている人がいれば、たとえ見知らぬ人であっても招き、自分よりもさきに食事を食べてもらわなくてはなりません。空腹な人がいないかどうか、道路に出て3度呼ぶのも世帯者のつとめです。このような定められた義務を無視すれば、とくに老人や子どもたちの世話を無視すれば、それは許されない行為といえます。

第44節

कच्चित् प्रेष्ठतमेनाथ हृदयेनात्मबन्धुना ।
शून्योऽस्मि रहितो नित्यं मन्यसे तेऽन्यथा न रुक् ॥ ४४ ॥

kaccit preṣṭhatamenātha
hṛdayenātma-bandhunā
śūnyo 'smi rahito nityam
manyase te 'nyathā na ruk

kaccit—～かどうか; preṣṭha-tamena—もっとも愛しい者に; atha—私の弟アルジュナ;
hṛdayena—もっとも親しい; ātma-bandhunā—自分の友、主クリシュナ; śūnyaḥ—空虚な;
asmi—私な～である; rahitaḥ—失って; nityam—いつまでも; manyase—あなたは考える; te—
あなたの; anyathā—さもなければ; na—決して～にない; ruk—心の苦しみ。

それとも、もっとも親しい友、主クリシュナを失ったことで底知れぬむなしさを感じているのだろうか。アルジュナよ。私には、おまえがこれほどふさぎこんでいる理由はほかには考えられないのだ。

要旨解説

世界が変わっていくその訳をマハーラージャ・ユディシュティラは知ろうとしているのですが、それはすでにかれ自身が、主シュリー・クリシュナがこの世界から離れていくのではないかと推測した考えにもとづいており、それはいま、アルジュナが見せている深い落胆の表情から明らかになっています。それ以外に、アルジュナがこれほどふさぎこむ可能性はありえなかったからです。ですから、マハーラージャ・ユディシュティラはその推測が当たっているのか定かではないのですが、シュリー・ナーラダがそれとなく話したことにもとづいて、アルジュナに率直に尋ねるしかなかったのです。

これで、バクティヴェーダンタによる『シュリーマド・バーガヴァタム』、第1編・第14章、「主クリシュナの他界」の要旨解説を終了します。